太鼓おどりで築く郷土愛

——小川町青年団——

“伝統芸能の灯を消すな、失われた郷土のよさをとりもどし、温かい心のふれ合う地域社会の実現をめざそう”と、いま、県下各地で青少年のふるさとづくり運動が盛んだ。

ここは、小川町公民館。ひょうきんな若者が踊りながら打つ太鼓の音が夜のしじまに鳴りひびく。それを見まもり、指導する保存会の古老、町教委の面々。三百五十年前にその源を発する“南小川太鼓おどり”は、いま確実に若者の手で受け継がれようとしている。

わたしの ぼくの 郷土

山鹿市立川辺小学校　六年　三浦雅子

私たちの郷土山鹿市は、昔から温泉町として栄えた田園都市で、市の中央を美しい菊池川が流れています。大昔から人々が住みついていた所で、その歴史を物語る数多くの史蹟や古墳を私たちの学校の周囲にも見ることができます。

春四月に開かれる温泉祭や毎年八月十五・十六日に行われる山鹿灯籠祭は、とってもにぎやかで、大勢の人が全国各地から見物にやってきます。

その中でも、特に、山鹿灯籠は、景行天皇が九州ご巡幸の時、菊池川をさかのぼって山鹿に着かれたが、霧が深くて上陸が困難だったので、村人がタイマツをとぼして迎えたのが、その起こりだと伝えられています。

ぬしは山鹿の骨なし灯籠、骨もなけれどにくもなしの「よへほ節」に合わせて踊る千人踊りや真夏の夜を飾る灯籠の美しさは目もさめるばかりです。私たちの学校でも、この郷土民芸を絶やさないため、秋の運動会には、全校リズムに灯籠踊りをしています。

また、日輪寺公園に植えられたつつじが満開の時は、まるで花の天国のようで、私たちを楽しませてくれます。

このように、私たちの郷土には、景色のよい自然やみんなに親しまれた民芸が今なお数多く残されています。

そんな平和な私たちの郷土ですが、最近、菊池川に新しく「山鹿大ぜき橋」がつくられ、国道三号線と並んで、交通量も多くなってきました。町には、大きなビルや工場などもふえ、新しい観光都市として生まれかわろうとしています。

しかし、私は、校歌の一節にある「月にねはんの岩仰ぎ、やみに荒瀬の螢追う。」の文句を口ずさみながら、この大自然に恵まれた郷土が、昔の伝統や面影を残しながら、湯の町山鹿として発展していくことを誇りに思っています。